「誘い」のシミュレーション会話における配慮の言語行動
―場面差・性差・親疎の比較―

日高　水穂
大友　麻理
塩出　大佑

1　はじめに

待遇表現は、円滑なコミュニケーションを維持・促進するためのものである。したがって、対人的な配慮が必要になる行動を行う場合に、もっとも表現の多様性が生じる。

配慮が必要とされる対人行動を類型化して示すと、次のようなものが考えられる。

表１　対人行動の類型

持ちかけ系	命令・禁止　依頼　勧め　助言・忠告　誘い　許可求め　申し出
応答系	承諾　断り
調整系	感謝　謝罪

このうち、持ちかけ系の対人行動に用いられる表現例をあげる。

表２　持ちかけ系の対人行動における表現例

対人行動	決定権	行為者	典型的表現（非敬語形）
命令・禁止	話し手	聞き手	～しろ、～するな
依頼	聞き手	聞き手	～してくれ
勧め	聞き手	聞き手	～すればいい、～したらどうか
助言・忠告	聞き手	聞き手	～したらどうか
誘い	聞き手	聞き手・話し手	～しよう、～しないか
許可求め	聞き手	話し手	～してもいいか
申し出	聞き手	話し手	～しようか、～してあげる（やる）

表２にあげた表現例は、各対人行動で用いられる典型的なものである。実際の言語運用においては、命令の表現を避けて依頼の表現を用いたり、申し出の意図で許可求めの表現を用いるなどの「待遇表現の相互乗り入れ」も起きる。また、表１のような直接的な表現を用いないで、意図を婉曲的に伝える（ほのめかす）言語表現も可能である。

こうした対人的配慮を必要とする言語行動の実態は、直接的（典型的）な言語表現の使用の有無を問う調査では、十分に把握することは難しい。

本稿では、「誘い」の場面を設定したシミュレーション会話を収録・文字化し、談話レベルでの配慮の言語行動を分析する。

2　調査の概要

調査内容は、２名１組で以下のような流れで会話をしてもらうというものである。

シミュレーション会話調査

次の内容・流れで、２人で会話をしてください。

会話の内容

この調査（※）が終わったあとで、一緒に晩ごはんを食べる約束をする。

※熊谷智子氏（国立国語研究所）と木谷直之氏（国際交流基金日本語国際センター）による三者面接調査（１時間程度）

会話の流れ

①誘う
②受諾する
③待ち合わせの提案をする
④別の提案をする
⑤約束が成立して会話を終了する

・２人で相談して、役割（誘う側・誘われる側）を決めてください。
・２人で相談して、会話の具体的な内容を決めてください。
・最後に①から⑤までの会話を実演してください。

話者は、秋田県内出身の秋田大学学生 14 組 28 名である。組み合わせは、親疎（初対面／友人同士）と性差（男同士／女同士）による、以下の４パターンである。

初対面男性ペア（４組）：初対面・男①、初対面・男②、初対面・男③、初対面・男④
友人同士男性ペア（３組）：友人同士・男①、友人同士・男②、友人同士・男③
初対面女性ペア（４組）：初対面・女①、初対面・女②、初対面・女③、初対面・女④
友人同士女性ペア（３組）：友人同士・女①、友人同士・女②、友人同士・女③

なお、初対面・男③が２年次と３年次の組み合わせであるのを除き、同学年同士（２年次か３年次）をペアとした。

調査時期は、2006 年 10 月 24～26 日である。

この調査は、熊谷智子氏（国立国語研究所）と木谷直之氏（国際交流基金日本語国際センター）による三者面接調査（１時間程度）に続けて実施した（男性ペアの調査員は木谷氏、女性ペアの調査員は熊谷氏）。その際、録画（女性ペアのみ）と録音により音声データを収録した。その音声データに基づき、大友、塩出が文字化を行った。文字化資料は「シミュレーション会話資料（誘い）」として、本稿末に掲載する。

以上の調査内容は、日高とともに大友、塩出が計画し、文字化データの分析方法も３者で検討した。

3　分析の観点

分析の観点としては、以下のものが考えられる。

（1）場面差

今回の調査では、「誘い」の実演場面だけでなく、打ち合わせ場面も音声収録・文字化した。それぞれの場面の会話の流れは、以下のようになっている。

【打ち合わせ】　①誘う側誘われる側の役割分担を決める
②会話の具体的内容を相談する
③相談を終える

【実演】　①誘う
②受諾する
③待ち合わせの提案をする
④別の提案をする
⑤約束が成立して会話を終了する

なお、男性ペアのうち、初対面・男①、初対面・男③は、打ち合わせを調査員に聞こえない（録音できない)程度の小声で行っていた。男性ペアでも友人同士には見られない行動であり、また、女性ペアには初対面・友人同士とも見られない行動であった。後の分析でも触れるが、男性話者は「調査」を意識する度合いが強く、特に初対面の相手との会話という緊張度の高い状況で、場面差を強く意識してこうした行動が生じたのであろう。

（2）話者の属性差と親疎関係

話者の属性差として、男性ペアと女性ペアの違いが比較の観点になる。また、話者間の親疎関係として、初対面と友人同士の違いも比較の観点になる。

（3）言語表現と発話のストラテジー

談話に現れる言語表現および発話のストラテジーに関して、以下のような項目が分析対象となり得る。

・発話量：話者交替の発話数、一発話の平均文節数
・発話の内容：話題の選択、話題のふくらませ方
・言語変種の選択：丁寧体／普通体、標準語／方言、上品な語／ぞんざいな語
・会話的な要素の現れ方：あいづち、くり返し、発話の重なり、笑い、沈黙（間)、聞き取り不能箇所
・談話展開のパターン：ターンテイキング（話者交替）の行われ方、話者のパーソナリティ（会話の主導権を取るタイプ／支援に回るタイプ）が談話展開のどのような部分に現れているか

以下では、発話量と発話の内容に関する分析を大友が報告し、言語変種の選択、会話的な要素の現れ方、談話展開のパターンなど発話のストラテジーに関する分析を塩出が報告する。

（日高水穂）

4　発話量と発話の内容に関する分析

4.1　談話の発話量

談話の発話量に関する調査をするにあたって、まず話者交替の起きた発話数を数えた。表３に、各ペアの発話の総数と、打ち合わせ場面と実演場面のそれぞれの発話数の割合を示す。

また、一発話の構成要素をいわゆる文節単位に分け、その数を数えた。一発話といっても、内容も長さも全く異なっているからである。発話数と文節数から、一発話あたりの平均文節数を集計したのが、表４である。

なお、聞き取り不能箇所と笑い声は１つの発話として数えているが、平均を出す時には使用せず、また、（Ａ：～)のように示されているあいづちは、話者交替が起こっていないものであるため発話扱いしていない。

表３　打ち合わせ場面と実演場面における発話数の割合

	発話数	打ち合わせ（%）	実演（%）
初対面・男①	46	0（　0.0)	46（100.0)
初対面・男②	57	38（ 66.7)	19（ 33.3)
初対面・男③	11	0（　0.0)	11（100.0)
初対面・男④	50	33（ 66.0)	17（ 34.0)
友人同士・男①	39	25（ 64.1)	14（ 35.9)
友人同士・男②	23	16（ 69.6)	7（ 30.4)
友人同士・男③	32	24（ 75.0)	8（ 25.0)
初対面・女①	126	56（ 44.4)	70（ 55.6)
初対面・女②	60	38（ 63.3)	22（ 36.7)
初対面・女③	79	7（　8.9)	72（ 91.1)
初対面・女④	60	35（ 58.3)	25（ 41.7)
友人同士・女①	67	48（ 71.6)	19（ 28.4)
友人同士・女②	81	20（ 24.7)	61（ 75.3)
友人同士・女③	72	40（ 55.6)	32（ 44.4)

表４　一発話における平均文節数

表 4-1　初対面・男

	ペア	A	B
初対面・男①	3.1	2.9	3.3
初対面・男②	3.5	2.6	4.4
初対面・男③	3.5	3.3	3.8
初対面・男④	2.5	2.4	2.6
平均値	3.2	2.8	3.5

表 4-2　友人同士・男

	ペア	A	B
友人同士・男①	4.5	4.8	4.2
友人同士・男②	6.6	8.5	3.9
友人同士・男③	4.9	5.4	4.2
平均値	5.3	6.2	4.1

表 4-3　初対面・女

	ペア	A	B
初対面・女①	3.5	3.7	3.2
初対面・女②	4.4	5.0	3.8
初対面・女③	3.6	4.5	2.6
初対面・女④	4.5	2.9	6.1
平均値	4.0	4.0	3.9

表 4-4　友人同士・女

	ペア	A	B
友人同士・女①	2.3	2.2	2.5
友人同士・女②	2.7	3.0	2.4
友人同士・女③	3.1	3.3	2.9
平均値	2.7	2.8	2.6

表３からは、まず男性と女性とでは女性の方が発話数が多いことがわかる。男性の発話数の平均は 36.9 であるのに対して、女性の発話数の平均は 77.9 となっている。初対面・男①と初対面・男③の談話では、打ち合わせ部分のデータがないことを考慮し、実演部分のみで比較しても、同じく女性の方が発話数が多くなっている。

容易に予想はできるが、打ち合わせと実演の発話数を比較すると、やはり打ち合わせの発話数の方が多くなっている。これは打ち合わせと実演の緊張度のちがいというよりは、ただ伝えるべき情報の量のちがいから生じる差のように考えられる。初対面・女③は、役割を決めただけで打ち合わせが十分には行われず、友人同士・女②も役割だけを決めてあとはアドリブでおこなっているものであるため、打ち合わせの発話数が少なくなっている。ただ初対面・女①は、打ち合わせを十分に行ったにも関わらず、実演の発話数も多い点が興味深い。

次に、表３により、初対面・男、初対面・女、友人同士・男、友人同士・女の４つのペアごとの発話数の平均を出すと、41.0、81.3、31.3、73.3 となる。男性も女性も、初対面の相手と話す方が発話数が多くなるようだ。

一方、表４の一発話の平均文節数を見ていくと、男性は友人同士の方が平均文節数が多く、女性は逆に初対面同士の方が平均文節数が多くなることがわかる。これらのことから、この４つのペアは、表５に示すように、発話量に関して異なる特徴を持つと言える。

表５　発話量による各ペアの特徴

ペア	平均発話数	平均文節数	特徴
(1)初対面・男	41.0	3.2	一発話が短く、会話全体は(3)に比べて長い
(2)初対面・女	81.3	5.3	一発話が長く、会話全体は(4)に比べて長い
(3)友人同士・男	31.3	4.0	一発話が長く、会話全体は(1)に比べて短い
(4)友人同士・女	73.3	2.7	一発話が短く、会話全体は(2)に比べて短い

また、同じ初対面という組み合わせでは、男性と女性とで平均文節数に大きな差はないが、発話数の方は男性 41.0、女性 81.3 であり、男性は女性の半分ほどになっている。女性は初対面の人が相手でも友人が相手でも、小さな発話のやりとりを繰り返して会話を盛り上げ楽しんでいるようだ。

4.2　発話の内容

男性ペアと女性ペアの発話の内容を見ると、男性ペアの会話が実に簡潔であることがわかる。女性ペアは、シミュレーション会話で設定された内容には直接関わらないことも話している。実演の方にとくにそれが表れており、男性ペアの会話は用件だけである。一方、女性ペアの方は実演であっても、調査の感想を述べ合ったり、(1)(2)のように別の待ち合わせを提案した相手をフォローしたり、(3)のように相手の都合を何度も確認したりしている。

(1)　初対面・女①

・100A：じゃあそれまで私もお腹空かせて

(2)　初対面・女②

・52B：そうした方が、あの…心の準備もあるし（笑い）

(3)　友人同士・女③

・45A：行きたい？／／まじで？

女性は、談話の中で「恥ずかしい」、「むずかしい」、「緊張する」などと言っていても、結局のところ会話すること自体を楽しんでいるような印象を受ける。女性は相手が初対面であっても、友人同士以上に会話を盛り上げることで、お互いを気遣い、初対面という気まずい雰囲気を消そうとしているのではないだろうか。

一方、男性ペアでは、初対面の相手だと、(4)のように、打ち合わせ場面でお互いの出方を探るようにつぶやきの発話が増える。それによって、友人同士に比べて発話数は多く文節数は少なくなっているのではないだろうか。友人同士の女性ペアの会話にも、(5)のように、繰り返しの発話は見られるが、実際の音声をきいてみると、繰り返しによる掛け合いの会話を楽しんでいるような雰囲気が感じられる。

(4)　初対面・男④

・7A：誘う…晩ご…
　8B：晩ごはんを食べるっていう…晩ご…
・22B：え、時間は…
　23A：時間は
・25B：別の提案
　26A：別の提案

(5)　友人同士・女①

・13B：この後、ご飯食べに行こ
　14A：いっしょにご飯食べ行こ。
・41B：あ、あ、どうする／／どうする
　42A：どうする、どうする

また男性ペアの場合、打ち合わせ場面で、食事の場所としてはじめに候補にあがるのが学食であることが多いようだ。学食を選ぶ理由は、それがお互いに確実に知っている場所であり、あまりむずかしく考えなくても手っ取り早く決めれることによるだろう。これは会話の緊張の表れと関係がありそうだ。

（大友麻理）

5　発話のストラテジーに関する分析

5.1　言語変種の選択

ここでは、言語変種の選択として、普通体と丁寧体の現れ方と方言の混在について分析する。各ペアが用いた基調となる言語変種を表６に示す。

まず、丁寧体と普通体の現れ方についてみていく。表６に見られるように、友人同士では、どのペアも普通体を選択している。それに対し、初対面のペア（男③、男④、女①、女②、女③、女④）には丁寧体の使用が見られた。特に初対面の女性ペアにおいて、丁寧体が選択され

る傾向が強いことが分かる。一方、初対面・女③と初対面・女④では、打ち合わせ場面では丁寧体が使用されているのに対し、実演場面では普通体が用いられている。これは、これらの女性ペアが、実際には初対面であるにもかかわらず、実演場面では親しい関係を「演出」する言語行動を行ったためと考えられる。こうした「演出」は、相手への親和的な態度を示す行動と見なせるが、これが女性ペアに限って見られたことは、注目しておきたい。

なお、初対面・女①では、打ち合わせ場面で普通体と丁寧体が混在しているのに対し、実演場面では丁寧体が用いられている。このペアの打ち合わせ場面の普通体は、打ち合わせ会話の前半に集中しており、後半ではほぼ丁寧体となっている。このペアの場合、打ち合わせ段階でどのようなスピーチスタイルを用いるかをお互いに探りながら最終的には丁寧体に落ち着く、というプロセスをたどったと見ることができる。

次に、標準語と方言の現れ方についても見ておく。基本的にはどのペアも標準語を使用しているが、友人同士の男性ペア（①、③）には、方言が現れる場合があった。

表６　打ち合わせ場面と実演場面で選択された言語変種

	打ち合わせ	実演
初対面・男①	―	普通体
初対面・男②	普通体	普通体
初対面・男③	―	丁寧体
初対面・男④	普通体と丁寧体が混在	丁寧体
友人同士・男①	普通体（方言混在）	普通体（方言混在）
友人同士・男②	普通体	普通体
友人同士・男③	普通体（方言混在）	普通体（方言混在）
初対面・女①	普通体と丁寧体が混在	丁寧体
初対面・女②	丁寧体	丁寧体
初対面・女③	丁寧体	普通体
初対面・女④	普通体と丁寧体が混在	普通体
友人同士・女①	普通体	普通体
友人同士・女②	普通体	普通体
友人同士・女③	普通体	普通体

次に、基調となるスピーチスタイルとは異なるスタイルが現れる場合を分析する。

普通体を基調とする会話の中に丁寧体（依頼形の「ください」を含む）が現れる場合には、あいさつ（例(6)）、冗談めかす場合（例(7)）、依頼する場合（例(8)）、緊張から出てしまう場合（例(9)）などがあった。

(6)　初対面・女③

46Ａ：今日は（笑い）（Ｂ：(笑い)）お疲れ

47Ｂ：<u>お疲れさまでーす</u>

48Ａ：<u>お疲れさまでーす</u>。今日ねー、おもしろかったねー

49Ｂ：楽しかったねー

50Ａ：ねー、楽しかったね

(7)　友人同士・女②

57Ａ：あれあれ西口のほらあの階段降りてほら交番あって

58Ｂ：あっ、あるあるあるある

59Ａ：あの車とまってるとこ、ロータリーみたいになってるとこ

60Ｂ：あっ、あるあるあるある。え、アルヴェの方わかりやすいじゃーん

61Ａ：ま、学校から近いですけどね

62Ｂ：(笑い)

(8)　友人同士・女③

63Ａ：じゃー駅東口に（Ｂ：うんうん）何時にしようかな、7 時ごろ

64Ｂ：7 時／／ー、7 時ちょっと間に合いそうにないから 7 時半に

65Ａ：どうかな？

66Ａ：7 時半／／に、半

67Ｂ：半に／／来てください

68Ａ：あ、一回帰る？

69Ｂ：一回帰る、××／／ごめんね

70Ａ：わかった、ううん。じゃまた／／後で

71Ｂ：うん、じゃあね

72Ａ：じゃあね

(9)　友人同士・男②

17Ａ：今晩一緒に晩ご飯食べに行かない？

18Ｂ：あーいいよ

19Ａ：それ…それじゃあ、えー、午後 7 時に…ご、午後 7 時に駅前のフォーラスの前で待ち合わせをしよう

（短い間）

20Ｂ：あー7 時に駅前だと…ちょっとーちょっと自分は講義の関係でちょっと間に合わないかもしれないからー、7 時半にアルベの前あたりにした方がいいんじゃないっすかね？

21Ａ：(笑い)

22Ｂ：(笑い)

23Ａ：いいよ。それじゃあ 7 時半にアルベの前で待ち合わせをしよう

丁寧体を基調とする会話の中に普通体が現れる例としては、以下のように、独話的で冗談めかして用いられたものがあった。

(10)　初対面・女②

39Ａ：えっと、あのー、この後、この調査終わった後に…あのー…もしよかったらなんですけどー…焼肉でも食べに行きませんか？

40Ｂ：全然いいですよ（笑い）

41Ａ：／／ほんとですか（笑い）

42Ｂ：行きましょう

43Ａ：ほんとですか
44Ｂ：肉好きです
45Ａ：それは××食べたくて、最近焼肉が
46Ｂ：肉の季節だなぁ…
47Ａ：（笑い）
48Ｂ：（笑い）食欲の秋ですからねぇ

5.2　会話的な要素の現れ方

会話的な要素の特徴として、まず、「笑い」というものに注目する。通常、笑いはおもしろいことがあった場合に起こるものであるが、そうではない場合もある。この調査で現れた笑いの種類は、あいづち的なもの（例(11)）、会話の区切りを表すもの（例(12)）、相手の出方をうかがうもの（例(13)）、緊張から出てしまうもの（例(14)）があった。

(11)　初対面・女①
113Ａ：6 時教育門に（Ｂ：はい）来て（Ｂ：んー）で、じゃああべとんに行きましょう
114Ｂ：はい（笑い）
115Ａ：おいしさは保障しますよ
116Ｂ：（笑い）分かりました（Ａ：はい）とんかつ最近食べてないんで

(12)　初対面・女①
51Ｂ：終わった～、恥ずかしい（笑い）超恥ずかしい（笑い）
52Ａ：ダメ～
調：（省略）
53Ｂ：え～（笑い）
54Ａ：はい（笑い）
55Ｂ：なんか演じるとか超恥ずかしいです
56Ａ・Ｂ：（笑い）

(13)　初対面・男②
18Ａ：どこ、どこにする、他どっかある？
19Ｂ：から、今日お金をおろさないといけないから（Ａ：あー）、学食前にしようっていう話にする
20Ａ：（笑い）
21Ｂ：ばっちりじゃない？

(14)　初対面・女③
1Ａ：（笑い）
2Ｂ：誘われたいです
3Ａ：あーじゃあ誘います
4Ａ・Ｂ：（笑い）

次に「繰り返し」の現れ方を分析する。繰り返しは、打ち合わせ場面には頻出するが、実演では一度も現れていない。また、片方の話者の発話が長い場合に現れやすいという傾向があるようだ。

(15)　初対面・女④

20Ｂ：あ、で、このま…時に（Ｂ：うん）駅前のお店になんか食べに行こうって（Ｂ：うんうんうん）言って。で、あたしは授業あるから（Ｂ：うん）6 時に駅に行くよー（Ｂ：うん）みたいな話を／／して（Ｂ：して）うん。それで（Ｂ：うん）約束が

21Ａ：そうだねー。みたいな

22Ｂ：そうだねー。みたいな（笑い）

23Ａ：終わる

24Ｂ：終わる

（中略）

33Ｂ：あ、イタトマ（Ａ：あ～）イタトマに食べに行かないですかっていうような感じになって（Ａ：うん）それで（Ａ：うん）5 時半正門でって（Ａ：うんうんうん）授業でいって（Ａ：うん）駅に 6 時に行くよーみたいな感じで／／言って（Ａ：言って）んで、あーじゃあそれでー（Ａ：うんうん）みたいな感じで

34Ａ：終わり

35Ｂ：終わり

このことから繰り返しには、確認やあいづちの意味とともに、直接意見を提示するわけではないが、話を２人で作り上げていると認識させる効果もあると言える。

次に「あいづち」についてみていく。あいづちの出現頻度は、男性より女性、友人同士より初対面、実演より打ち合わせの方が高くなる。発話量の違いも多少考慮しなければならないが、それを考慮してもこの結果は覆らない。ここから、あいづちは相手の出方をうかがう時に出やすいことがわかる。

次に「間」が持つ性質を考える。会話の最中に現れる間は単純に思考中というだけのものもあるが、友人同士より初対面の方が現れやすいことから、相手の出方をうかがっている場合にも現れるようだ。また、間を作ることにより相手にプレッシャーをかける効果もあるのではないかと思われる。

(16)　初対面・男④

1Ａ：はい

2Ｂ：はい

調：じゃ、ちょっと相談をしていただけますか？

3Ｂ：えっと、じゃ誘う方／／は

4Ａ：誘われる

（長い間）

5Ａ：じゃ、誘う側で

6Ｂ：じゃ、俺誘われる方で

(16)は、誘う側と誘われる側を決める会話のやりとりであるが、Aは4Aで「誘われる」と切り出したあと、おそらくBによる何らかの提案が続くものと期待したのではないだろうか。しかし、Bは何も発言せず、長い間が生じてしまった。そこで、AはBの発言が期待できないというプレッシャーから、自らが誘う側を買って出るという状況に至ったのである。

最後に「聞き取り不能箇所」についても、簡単に触れておきたい。傾向として、女性より男性、実演場面より打ち合わせ場面に多く現れた。これは、実演場面がいわば「公的」な発話を要求する場面であるのに対し、打ち合わせ場面の会話は「私的」なものと感じられたためであろう（話者には、打ち合わせ場面のデータを分析対象とすることは告げていなかった）。また、ここに性差が見られる理由は、先に述べたように、男性の方が調査を意識して緊張していたためと思われる。

5.3　談話展開のパターン

談話展開を考える上で、会話の主導権を取る側と支援に回る側が、どのように決定されるのかを分析する。実演場面では、誘う方が主導権を取ることになるので、ここでは打ち合わせ場面について考える。タイプとしては、以下の３種類が考えられる。

(a) 誘う役割になった方が主導権を取る。
(b) 誘われる役割になった方が主導権を取る。
(c) 主導権をどちらも維持しながら（あるいはどちらも維持しないで）会話をふくらませていく。

各ペアを以上の３つのタイプに分けると、以下のようになる。

(a) 友人同士・男①、友人同士・男②、初対面・女①
(b) 初対面・女④、(初対面・男②)
(c) 初対面・男④、初対面・女②、友人同士・男③、友人同士・女①、友人同士・女③
※除外　初対面・男①、初対面・男③、初対面・女③、友人同士・女②

除外したものは、打ち合わせ部分が小声のため聞き取れなかったもの、もしくは、打ち合わせ自体がなかったものである。初対面・男②は誘われる方が主導権を維持していたものの、役割を決めた後に、誘う方が役割を忘れて内容を打ち合わせていたため、括弧付きで示すこととした。

このように分類すると、友人同士では２人で会話をふくらませていくことが多いということが見て取れる。また、誘われる側が主導権を取る場合は少ないということが分かる。これは誘われる方という受身な役割を選択する方は、実際に会話をする際も受身な姿勢を示すということであると思われる。

（塩出大佑）

参考文献

中田智子（1991）「会話にあらわれるくり返し発話」『日本語学』10-10
橋内武（1985）「「もしもし」から用件に入るまで」『言語生活』407
ポリー・ザトラウスキー（1991）「会話分析における「単位」について」『日本語学』10-10
水谷信子（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12-4